

SHOW HEY シネマルーム

Data

監督・共同脚本・製作：マイケル・マン

出演：ジョニー・デップ / クリスチヤン・ベイル / マリオン・コティヤール / ビリー・クラダップ / スティーヴン・ドーフ / スティーヴン・ラング / ジェイソン・クラーク / ロリー・コクレイン / ジョン・オージェイス / デヴィッド・ウェンハム

パブリック・エネミーズ

2009年・アメリカ映画
配給 / 東宝東和
141分

2009 (平成 21) 年 12 月 29 日鑑賞

TOHOシネマズ梅田

👁️👁️ みどころ

アメリカ発の世界的金融危機が悪夢の大恐慌時代の再来とならなかったのは幸いだが、本作を契機にあの時代の再検証を！タイトルは過激だが、マイケル・マン監督とジョニー・デップには稀代の銀行強盗に対して同情的な目が？

それは、女の口説き方や「俺は殺されない」と交わす約束においても顕著？ くれぐれも、善悪の視点を明確にしたうえで、この誇り高き銀行強盗の評価をしなければ。

* * * * *

まずは、「あの時代」の理解を！

1950年代後半から一貫して高度経済成長を成し遂げてきた日本にとっての悪夢は、1990年前後のバブル崩壊。09年3月10日につけた日経ダウ平均史上最安値7054円98銭は、1989年12月29日につけた史上最高値38915円の18%というものすごさだ。09年年末には概ね1万5000円台となり、最悪期は脱したようだが、なお「二番底」の不安は解消されていない。

これに対して、アメリカにとっての悪夢は1930年代前半の大恐慌。大恐慌の時代、アメリカでは株価が暴落し失業者であふれていたが、その原因の1つが誤った金融政策をとった銀行にあったことが明らかだ。

日本でも銀行の貸し渋り・貸しはがしが常に問題となるが、サブ・プライムローン問題に端を発したアメリカのキャピタリズム（資本主義）の破綻は、マイケル・ムーア監督の『キャピタリズム～マネーは踊る～』（09年）をみれば明らか？すると、そんな銀行から金を奪っても庶民は怒らないばかりか、むしろ拍手喝采するのは？本作の主人公ジョ

ン・デリンジャー（ジョニー・デップ）がそう考えたかどうかは知らないが、本作が単なる銀行ギャングの活躍物語ではないことを理解するためには、まず「大恐慌時代」というアメリカの「あの時代」を理解する必要がある。

「地域主権」と対比した「連邦国家」の強みと弱みは？

政権交代後の民主党のキャッチフレーズの1つが「地域主権」。これは従来から主張されていた「地方分権」の延長だが、「地域」と「主権」を結びつけることがそもそも矛盾しているとの指摘もあり、その本格的検討が不可欠だ。他方、明治維新によって近代的統一国家を成立させた日本（人）が意外と知らないのは、アメリカの正式国名はアメリカ合衆国であり、連邦国家だということ。つまりアメリカ合衆国には、全体に適用される連邦法と州のみに適用される州法があるということだ。

日本では地方分権を進める議論の中で、道路の規格や幼稚園・保育所の面積まで国が画一的に決める必要はなく、地方毎に決めればいいという主張が有力になっているが、こと犯罪捜査に関しては、やはり日本国全体で共通であることが必要。州から州をまたぐことによって捜査の目をくらすデリンジャーやその仲間たちの動きをみていると、そう感じてしまう。FBIを創設し、その初代長官に就任したJ・エドガー・フーパー（ピリー・クラダップ）の名前は日本でも有名なが、それまでの州毎の犯罪捜査の限界を主張し、国家警察組織たるFBI創設の大きな要因になったのが「パブリック・エネミーNO1（社会の敵ナンバーワン）」と称されたデリンジャーであったことを本作で知ってビックリ。

なるほど優秀な官僚というものは、何でもうまいこと活用するわけだ。しかもフーパーは、デリンジャー逮捕のための指揮官として自ら抜擢したメルヴィン・パーヴィス捜査官（クリスチャン・ペイル）がデリンジャー殺害に成功した後人気が出てくると、これを追放してしまったというから恐れ入る。FBI創設にみるアメリカの「連邦国家」としての強みと弱みを、日本の「地域主権」の議論と比較しながらしっかり勉強しなければ。

どこかで見た顔と思ったら

本作は、脱獄と銀行強盗をくり返す「パブリック・エネミー」たるデリンジャーと、それを追うパーヴィス捜査官の男のドラマだから、基本的に登場人物は黒服の男ばかり。日本でも黒服のヤクザとそのヤクザを追う警察の猛者たちの区別がなかなかつかない（？）ように、本作にたくさん登場するデリンジャーの仲間やパーヴィス捜査官の部下たちをみても、どちらがギャングでどちらが捜査官がよくわからないことが多い。そんな中、まさに紅一点として登場するのが、デリンジャーの「俺の女になれ」「俺の女になるなら、二度と消えたりしないと誓え」という何とも強引な口説きの前にコロリと参ってしまう、クラブのクローク係の女ピリー・フレッシュット。

本作の設定ではピリーの父親はフランス人だが、母親がインディアンであるため虐げら

れている女性。そんなピリーを演ずるのは目の大きさが際立つ美女だが、さてこの顔はどこかで見たことがある……。そう思いながらやっと気づいたのは、何と彼女は『エディット・ピアフ～愛の讃歌』（07年）でアカデミー賞主演女優賞を受賞したフランス女優マリオン・コティヤールだということだ。本作では出番は少ないものの、バスタブでの文字どおり裸の演技やデリンジャーとの密会場所で逮捕されトイレにさえ行かせてもらえず拷問のような取調べを受けるすばらしい演技で、圧倒的な存在感を見せている。『エディット・ピアフ～愛の讃歌』ではどちらかという「ちんちくりん」のイメージだったが、本作における赤いドレス姿や毛皮のコートを着たマリオン・コティヤールの美しさには、デリンジャーならずとも一目ボレするはずだ。

なぜ、あんなに豊富な武器や車そして隠れ家が？

マイケル・マン監督が本作でこだわったのは、あの大恐慌時代のメイク、衣装、武器、車などをきっちりと再現すること。日本でも、私が修習生から弁護士2、3年目の1970年代は三つ揃いのスーツが主流になっていたが、今ではそんな姿はほとんど見られない。それと同じように、大恐慌時代のアメリカでは厚手の三つ揃いのダークスーツが主流？

私が驚くのは、マシンガンを中心とする武器の豊富さとV8（8気筒）に改造されたフォードの車の数々。まずは、ジョン・ウェイン主演の西部劇に出てくるライフル銃とは全然異質の、殺傷力抜群の重火器のようなマシンガンの連射に注目！また『俺たちに明日はない』（67年）のポニーとクライドも乗っていた、フォードのV8車に注目！

プレスシートによると、デリンジャー役を見事に演じたジョニー・デップは「笑い話だけど、子供の頃、かなり長い間、ジョン・デリンジャーに夢中だったんだ。でも、そもそもなぜ俺がジョン・デリンジャーに心魅かれ、僕の人生の大部分を占めるにまで至ったのか考えてみると、彼の性格だと思ふんだよ。男が本物の男だった時代の、男としての彼の存在だね。デリンジャー



Film 2009 Universal Studios. All Rights Reserved.

『バブリック・エネミーズ』

発売元：ジェネオン・ユニバーサル・エンターテイメント

発売日：2010年5月26日（発売中）

価格：4,179円（税込）

2010年7月現在の情報です

は、結果はさておき、一切の妥協がない、むきだしの彼自身だったからだよ」と述べているが、そこまで「パブリック・エネミー」たるデリンジャーを美化するのは、ちょっとヤバイのでは？

デリンジャーの考え方はやはり独善的？

本作を単なるギャングものにしていないのは、何よりもデリンジャーとピリーの恋がストーリーの1つの軸としてしっかり描かれているため。ピリーはデリンジャーの強引な口説きに落ちてしまうわけだが、それはきっと、客観的にみれば彼女の不幸のはじまり。この男との最高の恋がいつまでも続くはずはないこと、つまりデリンジャーはいつか逮捕されるか殺されてしまうことをきっと彼女はわかっていたはずだ。しかし、それでも束の間の幸せに魅かれ、デリンジャーに従っていったのはやはり悲しい女心？そう考えると「俺は約束は守る」「俺は殺されない」「俺は愛する女と年老いて死ぬ」といくらデリンジャーが宣言しても、その客観的裏付けは乏しく、彼の考え方は独善的だ。

彼の自信の根拠の第1は、自分の頭の良さや度胸、そして第2は警察の頭の悪さと組織力のなさ。たしかに何度も成功させる銀行強盗の手際の良さをみていると、その自信はよくわかる。しかし、成功体験に頼って結局失敗するのはどこにでもよくあるケースでデリンジャーもやはり過去の成功体験から脱け出せなかったようだ。パーヴィス捜査官の指揮する捜査がどこまで科学的か組織的かは別として、同じ仲間と同じことをくり返していれば、次第に成功の確率が下がるのは確実。したがってこの手の商売は「引き際」が大切だが、その点デリンジャーは？「大胆不敵」と「無謀」は紙一重で、「灯台もと暗し」の格言が妥当することはまちがいない。サングラスだけの仮装でデリンジャーがパーヴィスの捜査本部に入り込んでいくシーンではそれが顕著だが、いくら何でも幾重にもワナが張り巡らされている中、単身でピリーに会いに行くというのは無茶というものだ。さらに、それまで仲間だった連中が少しずつ捜査側に狙われていることくらいは気づかなければならないのでは？

当事者たるデリンジャーは自分の行動が緻密に計算された鮮やかな手口だと自信をもっていたようだが、客観的に全体をみた場合、彼の行動は常に紙一重でセーフになっていただけで、かなり独善的といわざるをえない。そうだとすれば、いつかそれが破綻するのは当然だ。その最後がクラーク・ゲーブル主演のギャング映画を観た直後に訪れようとは、お釈迦様でもご存知なかったはず・・・。

2009（平成21）年12月30日記